

原 著

障害児保育経験者の社会的自立

花谷香津世¹⁾ 板野美佐子²⁾ 奥山清子³⁾

就実短期大学 幼児教育学科¹⁾

旭川児童院²⁾

ノートルダム清心女子大学 家政学部 児童学科³⁾

(平成7年4月19日受理)

Social Independence of the Handicapped Children
Who Received Designated Mainstreaming in Nursery School

Katsuyo HANATANI¹⁾, Misako ITANO²⁾ and Kiyoko OKUYAMA³⁾

Department of Early Childhood Education¹⁾

Shyujitsu Junior College

Okayama, 703, Japan

Asahigawa Jidouin Children's Hospital²⁾

Okayama, 703, Japan

Department of Child Welfare³⁾

Notre Dame Seishin University

Okayama, 700, Japan

(Accepted Apr. 19, 1995)

Key words : social independence, follow up of mainstreaming, school, work,
life-span perspective

Abstract

Research has been done to find out the present condition of the 27 handicapped children who were mainstreamed to a regular nursery school during their childhood years. The handicapped mainstreamed to regular elementary and junior high school levels were of a higher rate. But in the high school level, most of them were in a special school. Such good results of integrated education were seen in the 80% who can do many things on their own. Their working areas are helping the household chores, managing to do such simple work at companies and workshops. In this survey, 63% are contented with their lives and are satisfied with their accomplishments in each day's undertakings.

Above 60% still need help in doing such social activities like cooking, shopping, using

public utilities like transportation.

On the part of the family, parents worry about their children's future especially about those who greatly need more assistance even in their daily activities of every life stage.

Finding out the effects upon the handicapped as they went through such education mainstreaming will give some basis for more plans, programs, and ways to uplift their condition. Factors that affect such condition can be checked and may be given a proper notion or view and a needed solution. If it pertains to education and life-span perspective, then the school curriculum should be rechecked from the nursery school up to the social and community welfare system.

要 約

障害児保育実施18年の成果と課題を探る手掛かりとして、障害児保育終了者のうち16歳から22歳までの27名を対象に、進学、就職、日常生活などに焦点を当てて、社会的自立の実態調査を行った。進学は、小学校と中学校では通常学校の養護学級へ進む割合が高く、高等学校では養護学校高等部へ進む割合が高くなっていた。現在の主な生活状況は、養護学校高等部在学中6名(22.2%)、家事手伝い3名(11.1%)、作業所を含む施設での作業手伝い11名(40.7%)、企業での軽作業7名(25.9%)となっており、保護者の63%が現在の生活に満足していた。

日常生活の自立のうち、身辺自立は80%以上可能であった。しかし、家族や他の援助が得られやすい社会的自立については60%以上が援助を必要としていた。

現在、家族が抱えている不安や悩みは、将来が安心できる施設などを含めた居住場所の確保、個人的、社会的日常生活の自立、就職に関係した課題など、全ライフステージにわたっており、障害児が青年期を迎えてもなお、将来への心配が尽きない状態である。

今後は、障害児自身の全ライフサイクルにわたる自立と支援を目標に、家庭生活も含めた保育園から学校教育に至る指導内容や、幅広い地域福祉のあり方が一貫したものになるよう再検討していく必要がある。

はじめに

岡山市では昭和51年から障害児保育指定園を設け、個別指導や、少人数のグループ指導を含めた形態の統合保育を実施し、以来、平成6年3月現在までに、303名を卒園させている。われわれは岡山市の障害児保育10年の経過と障害児保育終了者の予後、就学などの課題について、昭和62年に調査を実施した。その結果、障害児を持つ親の多くが、障害児保育の効果を肯定しながらも、将来に対する不安を抱えていることが判明した¹⁾。調査当時の対象児の年齢は7歳から14歳であった。その後、障害児保育開始から18年が経過した現在、進学や就職など新しい課

題を抱えていることが推測される。統合保育の効果については、子供の行動変容や健常児との仲間関係の側面からの研究が多いが、障害児保育経験者の追跡調査は少ない。

障害者の「社会的自立」にはいろいろな段階がある^{2),3)}が、ここでは日常の生活が社会生活に適応している場合を自立可能と考え、障害児保育経験者の卒園後の社会自立の実態と課題について調査し、障害児の自立の援助に資することを目的とした。

方 法

岡山市障害児保育拠点園6園の障害児保育経験者のうち、卒園後12年以上を経過した16歳か

ら22歳までの86名を対象とした。そのうち29名は住所不明であったため調査対象より除外した。調査は質問紙の送付により、障害児保育終了後の進路、現在の生活の満足度、生活の場、健康状態、日常生活の自立の状態、現在の不安や悩みなど7項目について保護者に回答を求めた。回答が得られたのは、質問紙を送付した57名のうち27名(47.4%)であった。回答を得た対象者の年齢、性別の内訳は表1に示した。調査期間は、平成6年4月18日より平成6年4月30日であった。

表1 対象者

単位：人

年 齢	障 害 程 度		
	軽 度	中 度	計
22歳	2	1	3
21歳	1	3	4
20歳	1	1	2
19歳	2	2	4
18歳	2	3	5
17歳	4	4	8
16歳		1	1
計 (%)	12 (44.4)	15 (55.6)	27 (100.0)

結果および考察

回答を得た方々の卒園時の障害の種別は、視力障害1名のほかはすべて精神遅滞であった。障害の程度は、軽度12名(44.4%)、中度15名(55.6%)であった(表1)。

保育園終了後の進路は、小学校の通常学級へ4名(14.8%)、養護学級へ19名(70.4%)であった。通常の小学校への進路が最も多く23名(85.2%)を占めていた。養護学校へ入学したのは、4名(14.8%)であった。中学校への進級の段階では、通常学級へ3名(11.1%)、養護学級へ15名(55.6%)、養護学校へ9名(33.3%)進級していた。通常の中学校への進路は18名(66.7%)で、小学校段階よりは通常学校へ進む割合は減少していた。その後は通常の高等学校へ2名、専門学校1名、施設5名と進み、19名(70.4%)が養護学校高等部へ進んでいた(図1)。

通常学校の中で養護学級の占める割合は、小学校で70.4%、中学校で55.6%であった。このことは、回答を寄せられた方々の障害の程度が軽、中度が多かったことによると思われる。障害の程度別に個々の事例をみると、小学校は軽

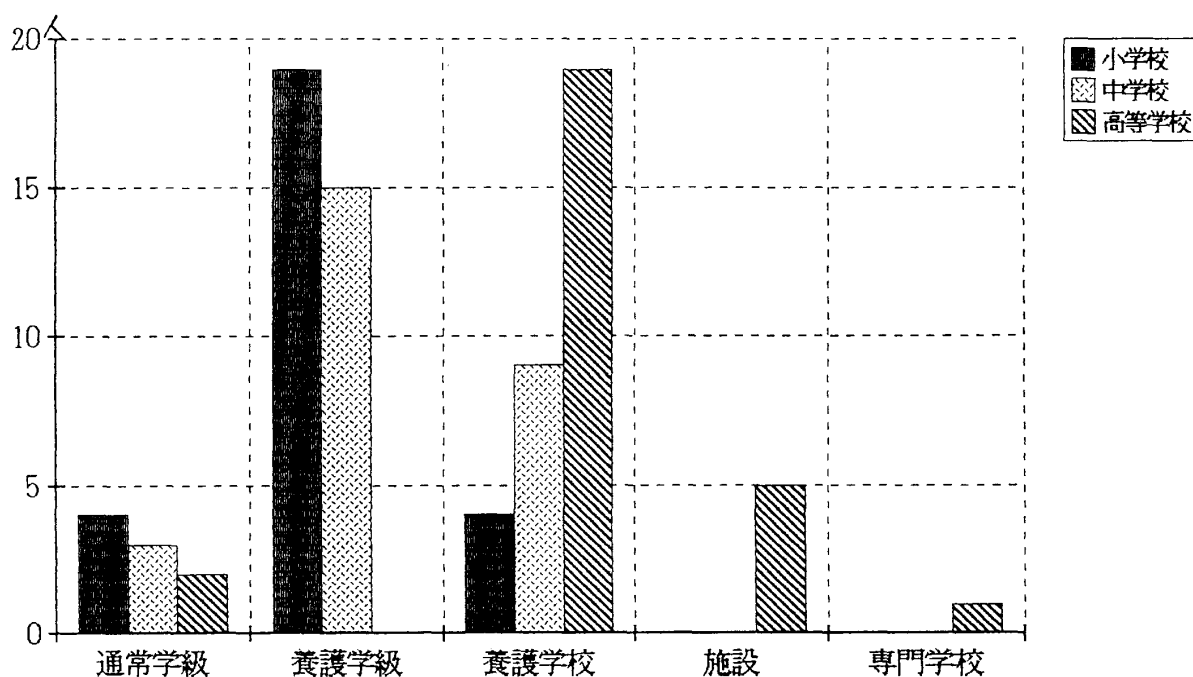


図1 障害児保育経験者の進路先

度の人が通常学級へ進むものが多いのに比べ、中度の人は養護学校へ進む割合が多かった。中学校でも同様の傾向が認められた。高等学校の段階では、大部分が養護学校高等部へ進学していたが、軽度の中には通常の高等学校や専門学校へ進学するものもみられた。さらに、就職状況をみると、軽度の場合は企業関係への就労の割合が高く、中度の場合は在宅の割合が高かった。身辺自立については、自立可能な人が軽度

の方にやや多いものの、中度との大きな差は見られなかった。買物や交通機関の利用など社会との接触の濃いものの自立については、軽度の場合、援助があれば自立可能な割合が高かったが、中度の場合、介助を必要とするものの割合が高かった(表2)。

現在の生活の場は、自宅で家族と同居が17名(63.0%)、施設入所が10名(37.0%)であり、両親、きょうだいと共にくらしている場合が多

表2 障害の程度別にみた進路先と自立

障害の程度		進路先			就職先等	自立の状態	
		小学校	中学校	高校		身辺	社会
軽度	A	◎	◎	▲	木工所	○	△
	B	○	◎	★	施設	○	△
	C	◎	☆	☆	食品関係	△	□
	D	◎	◎	☆	菓子工場	○	△
	E	◎	◎	☆	スーパー	○	○
	F	○	○	☆	印刷関係	○	△
	G	◎	☆	★	施設	○	○
	H	◎	◎	☆	施設	○	△
	I	○	○	○	施設	○	○
	J	◎	◎	☆	在学中	△	△
	K	○	○	○	在学中	○	△
	L	◎	◎	☆	在学中	○	△
中度	A	◎	◎	★	施設	○	△
	B	◎	◎	☆	施設	△	□
	C	◎	◎	☆	子供服	○	□
	D	☆	☆	☆	在宅	△	△
	E	◎	☆	★	在宅	□	□
	F	◎	◎	☆	施設	○	△
	G	◎	◎	☆	在宅	○	△
	H	◎	☆	☆	作業所	○	□
	I	◎	◎	☆	施設	○	□
	J	☆	☆	☆	施設	△	□
	K	◎	◎	☆	クリーニング	○	□
	L	◎	◎	☆	在学中	○	△
	M	☆	☆	☆	在学中	○	□
	N	☆	☆	☆	在学中	△	□
	O	◎	◎	☆	在学中	○	△

- 通常学校普通クラス
- ◎ 通常学校養護学校
- ☆ 養護学校
- ★ 施設
- ▲ 専門学校

- 自立
- △ 部分援助必要
- 全面援助必要

く見られた。健康状態は、病気勝ちで服薬している1名のほかは、特に問題がない状態であった。現在の生活状況は図2に見られるように、在宅3名(11.1%)、養護学校高等部在学中6名(22.2%)、施設入所10名(37.0%)、作業所通所1名(3.7%)、企業就職7名(25.9%)であった(図2)。在宅者は、年齢が増すにつれ障害が重度になったものが多く、家族の援助を得て可能な範囲で家事手伝いを日課にしていた。作業所を含む施設入所者(授産施設)の仕事の内容は、クリーニング、木工、プレスなどの作業の手伝いが主なものであった。また、企業に就職している7名の職場は、木工所、菓子工場、スーパー、クリーニング店、縫製工場、印刷工場、食品関係などであった。雇用形態は、正社員5名、準社員2名であった。仕事の内容は、製造、食品、作業手伝いなど軽作業が多かった。

在宅の方々は、将来本人が安心して過ごせる居住施設入所を希望し、養護学校高等部在学中のほとんどが卒業後の進路や就職に不安を持っていた。また、施設入所者は家から通勤できる企業就職を希望し、企業就職者は上司同僚との人間関係や通勤時間の長さ、休日が少ないこと、給料が安いことなどを悩みとしてあげていた。

本人の適正や作業能力などが有効に発揮できる職場や、それを支える地理的、物理的諸条件を満たすことの困難さがうかがえ、さらには、就労を支え、就労定着のために乗り越えなくてはならない問題が多いことがわかった。

現在の生活に対する満足度については、本人の意思を確認することはできなかったが、保護者の意見として満足63%、普通25.9%、不満11.1%と回答していた。

本人の相談相手は、両親が58.3%で最も多く、きょうだい19.5%と、相談相手の77.8%が生活を共にしている家族であった。家族以外に行き来する友達を29.7%の方が持ってはいるものの、相談相手になっている友達は8.3%と少なかった。職場の上司、同僚は5.6%、その他8.3%となっていた。本人の日常生活のうち、家庭での余暇の過ごし方は、テレビ38.2%、音楽20.0%、読書9.1%、その他12.7%となっており、一人で過ごす状態が多く趣味も少ない一面が見られた。

日常生活の自立は、起床、入浴、排泄など身の回りのことはいずれも80%以上で、ほぼ自立できていた。しかし、家族の援助が得やすい洗濯、掃除、調理などでは、それぞれ、25.9%、39.0%、7.4%となっていた。さらに、家族の援

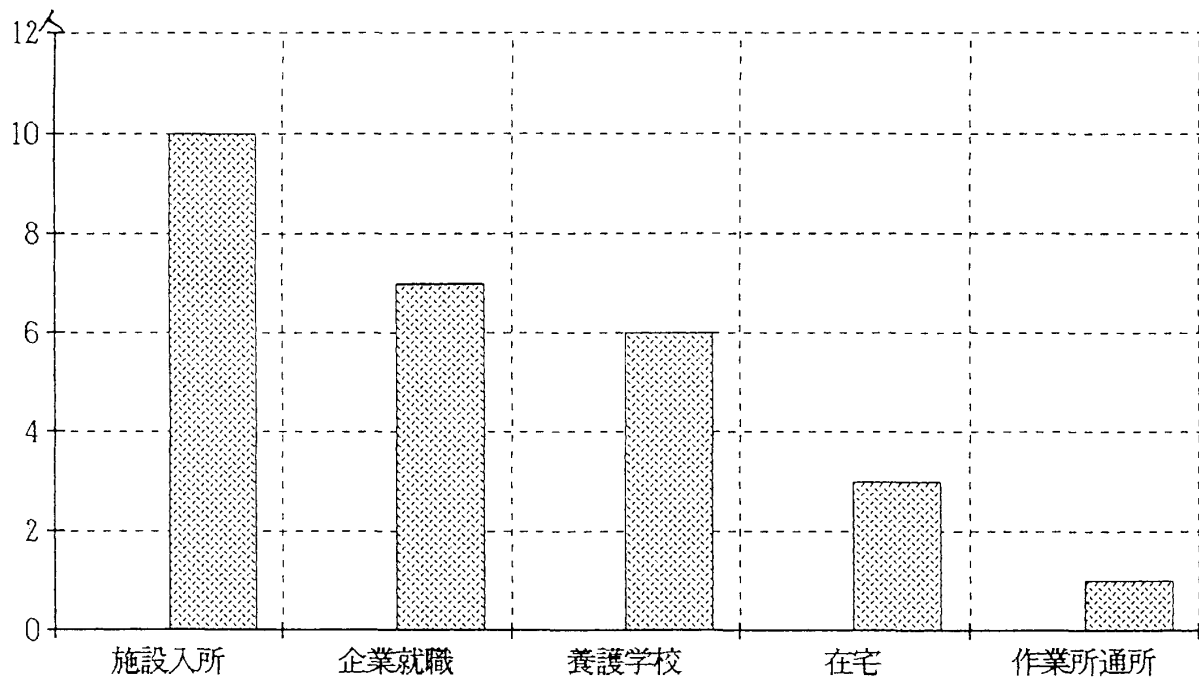


図2 現在の生活状況

助の届きにくい買物については、一人で行けるものは7名(25.9%)、きまった所なら行ける6名(22.2%)、家族と一緒になら行けるは11名(40.8%)であった。交通機関の利用については、一人で行けるものは4名(14.8%)、きまった所なら行ける16名(59.3%)、家族と一緒になら行けるは7名(25.9%)であった(図3)。これら社会との接触が必要なものには、自立の割合が低く、社会的自立への道は遠いといえる。現在、障害者の両親の平均年齢は、母親47.3歳、父親49.2歳である。健康、就労、職場の人間関係など子どもの将来への心配は尽きない状態であることがうかがわれた。家族の援助はもちろんであるが、幅広い地域福祉サービスの必要が望まれる。次に、過去の障害児保育経験が、現在の生活とどのように繋がっているかを見てみた。62%が育てる親側の効用、すなわち、障害児を持つ親同士の交流や、保育者との継続した繋がりがや励ましが、その後の子育ての力になったことをあげていた。障害者本人の成長や自立は、それを支える家族のあり方が大きく反映する⁴⁾意味からも、保育園において、同じ悩みを持つ親同士や保育を推進する保育者との社会的相互受容の場ができ、親にとっても重要な経験となっていた。一方、38%は保育経験者である子供側の効用、すなわち、身辺処理ができるようになった、健常児との触れ合いや集団生活の中

で友達ができいろいろな経験ができた、言葉が多くなったなどがあげられていた。

障害児保育、障害児教育の目指す目標の第一歩は、生活習慣の自立である。これまでの研究で、統合保育の成果の一つとして、生活習慣の自立があげられている^{5),6),7)}。われわれの調査結果でも、各項目のうち、入浴、排泄、起床などの身辺自立がまず可能となり、つづいて社会的自立に及ぶことが判明した。自立を目指す指導、援助は全ライフサイクルにわたって根気よく続けることが大切である。幼少の時期からの一貫した日常生活経験が、将来の社会自立のための重要な基礎を築くことになると考えると、生涯発達の視点のもとで日々の生活経験の中に基本的な生活能力、社会参加能力、作業能力などを培い、将来の自立を目標に、家庭生活をも含めた保育園から学校教育に至る指導内容のあり方を再検討していく必要がある。

現在、家族が抱えている悩みは、子供が年を重ねてもなお尽きない生活、就労など将来への心配であった。回答者全員の共通の悩みは、親の加齢と親亡き後の将来の不安が拭いがたいことであった。しかし、社会生活をするのは障害者自身であり、生涯のハードルを越える力は乳幼児時代からの家庭での養育、あるいは保育施設や学校教育のあり方にも大きく関係していると思われる。江草ら⁸⁾も述べているように、障害

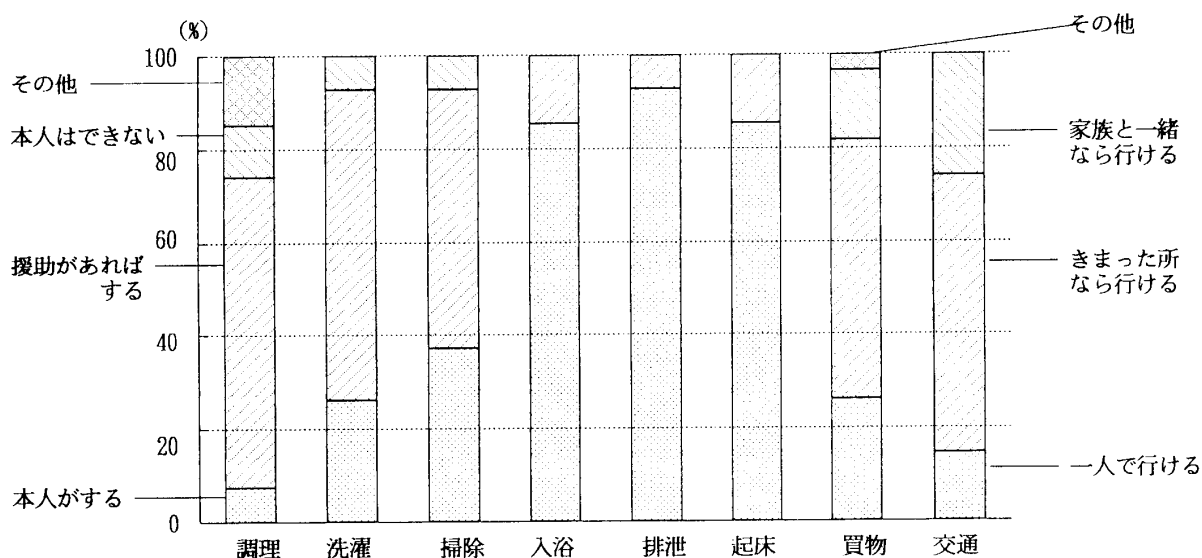


図3 日常生活の自立

児が青年期を迎える頃になって厳しい条件にたじろがないためにも、知識技術の修得と同時に、いかに生きるべきかという生活の態度をしっかりと身につけることが彼等の自立の成否と大きく関係するのではないかと考えられる。

障害児保育の経験は、保育園において単に彼等の社会的教育のスタートだけにとどまらず、学校教育を終えた後も、社会的自立のためには、各ライフステージごとに、彼等の日常生活、健康管理、就労などの生活を継続的に支えていく課題があることが明らかとなった。三谷⁹⁾の指摘にもあるように、社会生活を営む上での自立を考える時、発達を全ライフサイクルでとらえた教育内容が検討されなければならない。

結 論

障害児保育の経験は、その教育目標で重視された生活習慣の自立のうち、身辺自立がほぼ定着していることが確認できた。しかし、社会的

自立は学校教育を経た現在も、まだ継続して援助を必要としている状態であった。また、重視すべき点は、障害児保育経験が家族にとっても、社会的相互受容の場として、その後の障害者の成長や自立を支える重要な役割を果たしていることである。

一人ひとりの障害者が、家庭、保育園、学校、職場、地域など各ライフステージごとに、別個の視点でとらえられ導かれても、その生活、指導、療育が継続的、統合的に集約されなければ意味を持たないことになる。今後は、早期療育から老化対策に至るまで、一人ひとりの障害者が希望の持てる社会にしていくために、障害者と家族の努力に加えて、福祉、教育、医療関係者の体系的連携、市民の理解と良質なサービスなど相互協力の推進が望まれる。こうした意味においても、社会的教育のスタートの場となる障害児保育が果たす役割は重要である。

文 献

- 1) 本保恭子, 民実政枝, 花谷香津世, 板野美佐子, 江草安彦 (1988) 障害児保育終了者の予後について. 小児の精神と神経, 28(2), 153-161, 69-77.
- 2) 江草安彦 (1985) 年長心身障害児・者福祉対策委員会編集, 心身障害児・者の自立と社会参加をめざして. 年長心身障害児・者福祉対策報告集, pp1-42.
- 3) 内海 淳, 山田耕一郎 (1993) 卒業後の暮らし. 精薄教育, 8, 28-36.
- 4) 藤田弘子 (1990) 「養護学校」の行方. 初版, ミネルヴァ書房, pp63-112.
- 5) 松阪清俊 (1985) 統合保育における発達障害幼児の発達の变化. 発達障害研究, 6(3), pp208-220.
- 6) 畑山みさ子, 古田倭文男, 足立智昭, 白橋宏一郎 (1990) 障害児の統合保育に関する調査研究. 発達障害研究, 12(2), 146-152.
- 7) 杉山弘子, 佐藤陽子 (1992) 仙台市の保育所における統合保育についての調査研究. 尚絅女学院短期大学紀要, 187-195.
- 8) 江草安彦, 小出 進 (1989) 教育と福祉. 講座発達障害第7巻, 初版, 日本文化科学社, 東京, pp1-28.
- 9) 三谷嘉明 (1989) ノーマライゼーションの原理とその展開, 三谷嘉明編著, 障害児に開かれた学校と社会, 明治図書 pp127-151.

お子さまの生活状況について — 1994.4 —

1. 性別(男・女) 年齢(歳) 卒園年月(年 月)

2. 現在のお住まいは、次のどれですか。

- イ. 自宅(家族と同居) ロ. 自活(アパート)
- ハ. 施設(道名)
- ニ. その他()

3. 現在の健康状態は次のどれですか(○印複数可)

- イ. 特に問題はない
- ロ. 病気がちであり、よく医者にかかる

ロ. を選ばれた方のみ、おこたえください。
 1) 服薬をしている
 2) 成人病にかかっている

4. 今までの進路先を教えてください(○印複数可)

幼児期	イ. 保育園 ハ. 施設等	ロ. 幼稚園 ・パンビの家 ・児童院	ロ. 幼稚園 ・みどり学園 ・ことばの教室	ニ. その他()
小学校	イ. 通常学級 ニ. 施設() ホ. その他()	ロ. 養護学級	ハ. 養護学校	
中学校	イ. 通常学級 ニ. 施設() ホ. その他()	ロ. 養護学級	ハ. 養護学校	

青年期	イ. 高等学校 ニ. 在宅 ト. 施設入所 リ. その他()	ロ. 養護学校高等部 ホ. 作業所・通所 チ. 企業就職	ハ. 専門学校 ヘ. 入院
就職後、進路変更経験のある方は、その変更を簡単に記入してください。 例：会社(3年)⇒作業所(3年)⇒会社(2年)			

5. 現在の生活に満足していますか。

- イ. 大変満足 ロ. 満足 ハ. 普通
- ニ. やや満足 ホ. 不満

6. 就職されている方のみ、おこたえください。
 1) どんなお仕事をされていますか。差し支えなければおこたえください。
 例：クリーニング

2) 雇用形態は次のどれですか。

- イ. 正社員 ロ. 準社員(嘱託・臨時) ハ. パート
- ニ. その他()

3) 職場での悩みや困っていることは、次のどれですか(○印複数可)

- イ. 同僚や上司との関係 ロ. 給料が安い
- ハ. 残業が多い ニ. 休みが少ない
- ホ. 仕事危険、汚い ヘ. 仕事合っていない、難しい
- ト. 仕事がきつい、疲れる チ. 通勤時間が長い
- リ. その他()

7. 日常生活の様子についておこたえください。
- 1) 調理は
 イ. 本人が作れる
 ニ. その他 ()
 ロ. 援助があれば作れる
 ハ. 本人は作れない
- 2) 洗濯は
 イ. 本人がする
 ニ. その他 ()
 ロ. 援助があればする
 ハ. 本人はできない
- 3) 自分の部屋の掃除、整理は
 イ. 本人がする
 ニ. その他 ()
 ロ. 援助があればする
 ハ. 本人はできない
- 4) 入浴は
 イ. 本人がする
 ハ. その他 ()
 ロ. 援助があればする
- 5) 排泄は
 イ. 一人で行く
 ハ. その他 ()
 ロ. 援助がいる
- 6) 起床は
 イ. 本人が自分で起きる
 ハ. その他 ()
 ロ. 家族が起こす
- 7) 交通機関の利用
 イ. 一人で行ける
 ハ. 家族と一緒になら行ける
 ロ. 決まった所なら行ける
 ニ. その他 ()
- 8) 近所への買い物は
 イ. 一人で行ける
 ハ. 家族と一緒になら行ける
 ロ. 決まった所なら行ける
 ニ. その他 ()
- 9) 日常的に交際している友だちはいますか。
 イ. いる
 ロ. 特にいない
 ハ. わからない
- 10) 友だちはどの時期の人ですか。
 イ. 保育園時代の仲間
 ニ. 地域の仲間
 ロ. 学校時代の仲間
 ホ. その他 ()
 ハ. 職場の仲間
- 11) 主な余暇の過ごし方は次のどれですか。
 イ. テレビ
 ニ. ゲーム
 ロ. 音楽
 ホ. その他 ()
 ハ. 読書
- 12) 本人がよく相談する人は次のどれですか (○印複数可)
 イ. 両親
 ニ. 地域の親しい人
 ト. その他 ()
 ロ. 兄弟姉妹
 ホ. 職場の同僚、上司
 ハ. 友だち
 ヘ. 保育園の先生
- 13) 現在、お子さまのことで心配なことは何ですか。
 イ. 日常生活
 ハ. 交際・結婚
 ホ. 就労上のこと
 ト. 将来のこと
 ス. その他 ()
 ロ. 性について
 ニ. 経済的なこと
 ヘ. 余暇利用
 チ. 施設入所
 差し支えなければ、具体的に書きください。
- 14) 過去に障害児保育を受けたことをどう思われますか (○印複数可)
 イ. 子どもにとって保育園での経験が、後々とても役立った
 ロ. 親同士が仲良くなることができた
 ハ. 保育園の先生との交流がよかった
 ニ. 障害児保育を受けたことは、子どもにとってマイナス面が多かった
 ホ. その他 ()
- 15) 今後の生活でどのような希望がありますか。
 イ. 現在のままでよい
 ハ. 就職させたい
 ホ. その他 ()
 ロ. 居住施設へ入所させたい
 ニ. 作業所へ通所させたい
- ☆☆☆☆☆ ご協力ありがとうございました ☆☆☆☆☆
 記入なさった方はどなたですか
 続柄 () 年齢 (歳)